

教材としての児童文学の研究—神沢利子の作品を中心に—

宮川 江里

一、神沢作品の特徴

児童文学の中で神沢利子の作品は小学校の国語の教科書に数多く取り上げられてきたためなじみぶかい人が多くはらずである。教科書だけでなく雑誌や新聞の創作作品を生みだしている。童話だけでなく、童謡や詩の創作も行っている。子供の心にすんなりと溶けこむような神作の中からも、主人公に特徴を探って行きたい。数多い作品の神作でもあり代表作の「ちびっこカムのぼうけん」神沢の処女作でもあり代表作の「ちびっこカムのぼうけん」台所で毎日の生活を支える小物に目を向けた「ふらいばんじいさん」、自伝的小説の「いないいないばあや」この四つが神沢作品の奥に含まれていて、その作品を取上げながら神沢作品の奥に含まれていて、その作品を取上げる。思ふ。

「くまの子ウーフ」はあどけない純粋な熊の子どもの主人公にした童話である。一九六九年に発表され、それから三十年近くたった現在でも書店の店頭に並び、教科書にも掲載されている。それはいつの時代でもウーフの言葉が新鮮さを失っていないからだろう。幼い子どものささいな質問や、発想におとながはたとさせられるようにウーフもまた、おとなを驚かせたり子どもを納得させている。それはウーフがただ毎日楽しく愉快に過ごしているだけではないからだろう。ウーフの日々の成長が綴られている文章には子どもらしさがあふれ、幼児期の汚れない幸せに満ちあふれた世界がある。「誰にも幼年期に経験した金色の時間をよみがえらせた」(山下明生「くまの子ウーフ」講談社文庫版解説)とも表現させられている。しかし、ウーフの世界は金色だけではない。生きていくことを確かめるように自分自身は何でできているのかを真剣に問い詰め、不安になりながらも答えを見つけて行くウーフは金色の御伽噺の登場人物ではない。

金色に輝く世界をふとよぎるかげり、ふいに目の前にあらわれる暗がり、あるいは足下に口をあける闇、そうしたものがかかれています。

(清水真砂子「神沢利子論—問いを生きつづける—」)

(「日本児童文学」一九七九年八月号)

ウーフの世界には光と闇が共存している。それは人間の子どもだって同様である。生きて行くうえで闇の部分をしつかりと見据えることが必要であることを神沢利子はウーフの姿を借りて、子どもの視線と言葉でうまく表現している。

「くまの子ウーフ」は日常の生活のなかで成長して行く子どもの姿を捉えた作品であるが、それとは全く別の角度から子どもの姿を描いたのが「ちびっこカムのぼうけん」であろう。神話的な舞台で大地を駆け巡り、月や星までもロープをかけて活躍するカムの姿はウーフとは全く違ったヒーローである。そのヒーローは病気の母親を救うために冒険をする。母親の命をきっかけとして自分自身が生きて行くための冒険となっていく。

主人公のあらゆる行動が終局において生命の指向性を持つことによつて、神話的世界が総括されているようにおもわれる。

(桜井信夫「ちびっこカムのぼうけん」論—神話的世界の再創造—)「日本児童文学」一九七五年三月号)

このようにカムは生きることに向かっているのである。ウーフは生きて行くうえで闇に戸惑い、悩み立ち止まってみるが、カムは立ち止まることなく生きるためにひたすら前進して行く。形に違いがあるが双方とも生きることに向き合っている作品である。「ふらいばんじいさん」にも「生きる」ことが描かれていて。毎日台所で目玉焼きを作ることが大好きだったが、その役目をほかのフライパンに取られたことから、本来

命あるものでないフライパンが一人て歩き、旅に出る。その結果見つけた第二の、卵を守る巢になることである。目玉焼きを作ること、卵を守る巢になること、全く正反対の立場を描きながら食べる側、食べられる側の存在を浮き彫りにしている。この食べることは生きることにつながるが、フライパンという無生物を主人公にすることによって食べることにたいしての生々しさを和らげている。「ふらいばんじいさん」は楽しい明るい作品であるが神沢の次のような思いが含まれているのではないか。

「食べる」ということが主題になつてゐるのかも知れませんが、人間が生きてゐることは他者を食べるということであり、それから生物のことがいふことは、それをどういふふうにか肯定しようかといふことではないか。

（「神沢利子インタビュー」おもいっきり楽しい作品を書きたい）「日本児童文学」一九七五年三月号）

動物を食べてゐる、という事実は幼い子どもにとつてショックなことである。それを超えながら成長して行く。神沢作品はその問題を正面に見捉えながら子ども達に生きることを貴き、難しさを示唆している。神沢の幼年期をモデルに綴つた「いいいいいい」では神沢作品の根底にあるものが幼い主人公橙子の目を通して書かれてゐる。幼いころだれもが感じた不安、恐れがそのまま描かれてゐる。「抱きしめられたこと」で自分があるとうやうや分る気がするのだった。と（「神沢利子」いいいいいいばあや 岩波書店）このように主人公は何度か自分自身の存在を確かめ、また、兄弟やばあやの存在までも確かめようとする。この存在を確かめるといふことは生きてゐることを確かめてゐることにつながつてゐる。逆に考えれば生きてゐることへの執着であり、死にたいとする恐怖が存在を確かめる行動になつてゐるのだから。また、「いいいいいいからそ存在では死、性、老い、など人間が生きてゐるからそ存在する陰の部分を見つすくに見つてゐる。「鳥でも犬で

も馬でも、女だけが持つてゐるたまご。人間のおなかにもあるというたまご……だけどどうしてなんだろ。」「いいいいいいばあや」と考える橙子は性の不思議さまたそこには漂う薄暗い雰囲気を感じたまごで取つてゐる。ここにはウーフの「めんどうき」を敏感に感じてゐる。「の発想にもつながる。橙子とウーフの共通点はそれだけではない。自分自身は何で生きてゐるのかと問ひ続け、ウーフと、自分の存在を確かめる橙子は同じ不安と悩みを持つてゐる。ウーフは自分自身と向き合うことで、また橙子は周囲の人とのかわりの中から自分自身を見つけたそうと不安でゐる。これは神沢自身も生きているところの疑問と不安であつたものを神沢自身も生きていることとは、自分とは、が見えて来た結果をウーフや橙子に語らせてゐるのだから。ここに取上げられた四つの神沢の作品には「いのち」を感じることで生きていることを真剣に考へてゐるウーフや橙子。病気の母のため、また生きるために冒険をするカム。人間の命のためにはたまごを焼き、「生きる」こと、「いのち」が神沢利子の作品の原点になつてゐる。それぞれ形は違つても一貫したテーマとして貫かれてゐる。

二、教材としての神沢作品

神沢利子の作品は昭和五十二年の光村図書「しょうがっこうこくご（上）」で「くまの子ウーフ」が掲載されてゐる。神沢作品が長年国語教室で慕われてゐるのはどういった理由からか、教材研究をしながら考へる。

（一）、「ウーフはおしっこで

できているか？」の教材研究

「ウーフはおしっこでできてゐるか」は現在では日本書籍「わたしたちの小学国語2下」に掲載され、単元名「考え方のおもしろさをみつけないながら」となつてゐる。そ

ここでこの作品の内容的価値と技能的価値を考えた。

◎ 内容的価値
この作品の主題は次のようになる。

身の回りに起こる疑問を解決して行くなかで自分自身は何であるのか、を考えることによって成長して行くウーフの姿。

ウーフは目に入るもの、耳で聞いたもの、手で触れたもの、舌で味わったもの、鼻でかいだもの、体で感じたすべてのことに対して疑問を抱き、考え、発見を繰り返して行く。好奇心旺盛な子どもの姿がそのまま描かれていく。子どもらしい発想で疑問を解決して行きながら少しずつ成長していくウーフには無邪気さ、豊かな想像力、子どものすばらしさがあふれている。

このような主題をもつ「ウーフはおしっこでできていますか?」にある内容的価値を学習指導要領と照らし合わせてながら考える。

第2 各学年の目的及び内容

1 目標

(2) 事柄の順序を考えながら話を聞いたり、事柄の順序や場面の様子の移り変わりなどに注意しながら文章を読んだりすることができるようになるとともに、易しい読み物を進んで読もうとする意欲を高める。

「ウーフはおしっこでできていますか?」の構成は起承転結の四段落構成になっている。第一段落では、卵をきつかけにして、ものの素材を知りたがる好奇心旺盛なウーフの姿がある。この段落全体が問題提起文になっている。と言えるだろう。第二段落のめんどりの体に卵が百個以上あるだろうという推測から「めんどりはたまごでできています」と思いつくウーフは第一段落から発展させて物事を考えている。第三段落のツネタの登場が転換にな

りに気づき、さらに自分自身はウーフであるということを確認することで結論としている。このような構成は子どもたちがウーフの考えたこと、おもったことを移り変わりを読み理解を深めて行くうえで非常に分かりやすいものである。また、題名が奇抜なもので読んでもみようという意欲がもちやすいというのもこの目標に適した素材である。

第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱い

(2) 3 思考力や想像力および言語感覚を養うのに役立つこと。教材を取り上げるうえでの観点

(4) 科学的、論理的な見方や考え方を育てる態度を育て、視野を広げるのに役立つこと。

(5) 生活を明るくし、強く正しく生きる意志を育てるのに役立つこと。

(6) 生命を尊重し、他人を思いやる心を育てるのに役立つこと。

(2) ウーフの独特の考え方や想像力は子どもたちを楽しませ、自らも自分なことでできているか考え、卵でできていめんどりや、おしっこでできているウーフなど、自分なりの創造を広げることが出来る題材が多い。会話文の言葉は「しちやった。」などの小学二年生の言葉なものが日常用している言葉とあまり相違がない。言葉なものが、抵抗なく受け入れ言葉を増やすことにつながるだろう。

(4) ウーフがおとうさんに身の回りにある物がなにでできているかをたずねている場面では子どもたちもウーフと同様の興味をもつことができていろう。また、ウーフの考え方は突拍子もないことを言っているようだが卵からでてくるものは白身と黄身で、その白身と黄身で卵はできているという原理から、動物も体からでてくるものでできているという論理から、動物も体からでてくるもので成立するものであり、さらに自分なりの論理を組み立てるきっかけになるだろう。

1フの考え方は突拍子もないことを言っているようだが卵からでてくるものは白身と黄身で、その白身と黄身で卵はできているという原理から、動物も体からでてくるものでできているという論理は学習者の子どもたちの中でも成立するものであり、さらに自分なりの論理を組み立てるきっかけになるだろう。

(5) 1ウーフの周囲に元気にあいさつする様子などの周囲に対する礼儀正しさがさりげなく描かれ、「生活を明るく」することに役立つ要素がある。

(6) 「僕の中からだからであるのは、おしっこだけじゃないや。ちもであるし、なみだもであるよ。」このウーフの言葉は生きていく証しを確認している言葉である。自分の体についてじっくり考えているウーフの姿は「生きてくれば生命を尊重することにつながるだろう。」このように「ウーフはおしっこでできているか？」では学習指導要領に沿ってみると内面的評価は高いものと考えられる。

◎ 技能的価値
ここでも学習指導要領に準じて技能的価値について考える。

第2 「第二学年」 各学年の目標及び内容

A 2 内容表現

(1) ア 相手の話の内容を受けて話したり、自分から進んではなしたりすること。

B 理解

(1) エウ 文章の内容を考えながら音読すること。時間的な順序、場面の移り変わり、事柄の順序などを考えながら、内容を讀みとること。

オ 文章の叙述に即して内容を正しく読みとらうとすること。

カ 人物の気持ちや場面の様子を想像しながら読むこと。

A (1) アー「ウーフはおしっこでできているか？」はウーフの独特な考え方を軸に物語が展開している。学習者の子どもたちは一人一人違った意見や感想をもつだろう。それをみんなで発表し合うことが教材を読み深めて行くうえでは必要である。そこでお互いの話を聞き、また、自分の意見の感想を述べる機会を得られるだろう。

B (1) ウーフの言葉を声にだして読むことも音読は必要である。ウーフの言葉を声にだして読むことができていくだろう。また、擬音語、擬態語の使われ方がリズムを与えており、音読に適した素材と言えよう。

エ、オ「ウーフはおしっこでできているか？」はウーフが「たまごはなにできていたの。」という疑問を抱いてから「ウーフはウーフでできているんだ」という考えをもつまでの過程を描いたものである。そのため、時間的経過、場面の移り変わり、事柄の順序は内容を理解するために欠かせないポイントである。事柄の内容を追いつながら内容を読み取ることがしやすい典型的な起承転結の四段落構成になっている。

カーウーフは両親、めんどり、ツネタとそれぞれと交わした会話の中でさまざまな考えをもつ。その時々ウーフの気持ち、そしてなぜウーフがそう思うのか、と考えることが学習を深めて行くうえで必要である。「たまごはなにできていたの。」「めんどりはたまごでできているんだ。」「うそだ。」「おしっこなんかできているや。」「ウーフはウーフでできているんだ。」とそれぞれの場面でのウーフの様子を想像しながら読むことをその物語を楽しむうえでは必要なこと、それを学習者が抵抗なくできる文章である。

以上のことから文章構成、内容が教材として適していることが明確である。特に読み取りに関する項目で価値が高い。

(二) 「いちごつみ」の教材研究

「いちごつみ」は昭和四十三年から東京書籍「じょうかくくご」の第二学年の国語教材として掲載されている。一九六三年に福音館の「こどものとも」に発表された。神沢の初期の作品で絵本第一号でもある。

◎ 内容的価値

この期の児童は、語彙力も豊かになり、想像力、表現力も育ってきている。このような時期をとらえ、場面の展開やすじを追って童話を読むだけではなく、登場人物の気持ちや性格を考をまとめたりおもしろかったところを発表したりできる積極的な「読み」の態度を育成するように発展させたい。本教材は、想像することの楽しさを十分に満足させ、この期の児童に読書力をつけるものとしてふさわしい。(「新しい国語 教師指導書研究編 上」東京書籍)

話の展開にもくまが家を修理してくれるという意外さがあり楽しいお話である。くまのせりふが「ウーフ」「ウッフー」だけであり、想像力をかきたられる。主題は次のようになる。

言葉が通じないくまとの心で交流をする女の子の姿
言葉の通じない部分は想像力を使い補って読み進めて行くことで、読書の楽しみを見つかることができれば「積極的な「読み」の態度を育成する」ことにつながる。このくまと女の子の会話を中心にして物語が展開している。それと女の子の気持ちが読み取りやすくなっている。主題を読み取ることより、女の子とくまの会話を楽しむことが教材の価値を生かすことになるだろう。また神沢自身も次のように述べている。

この物語がとらわれない自由な心の、自由な人間と自由な熊(このいいまわしは少しおかしいが)との一日のドラマであって、べとつかない、さわやかな森の風の吹くような世界が、そこに広がっていけばよいと思う。

このように女の子とくまの姿を非現実的なことにこだわらずに受け入れる自由な心が物語を読み取り、楽しむうえで一番必要なものであろう。テーマにこだわらずにそれぞれ読者が自由に想像を膨らませることができるとがこの教材の一番大きな価値であらう。

もっと細かく内容的価値を第一節を同様に学習指導要領に照らし合わせて探る。

第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱い

3 教材を取り上げるうえで、の観点に役立ちこと。思考力や想像力および言語感覚を養うのに役立ちこと。

(5) 生活を明るくし、強く正しく生きる意志を育てるのに役立ちこと。

(6) 生命を尊重し、他人を思いやる心を育てるのに役立ちこと。

(7) 自然を愛し、美しいものに感動する心を育てるのに役立ちこと。

(2) くまのせりふを考えることは前述のように想像力を広げることほもちろん自分なりの言葉でびったりと当てはまるせりふを選ぶことで、言葉の精選をし、言語感覚を磨けるのだろう。

(5) 女の子の明るく無邪気な様子は心を和ませるものである。生活を楽しんでる印象を女の子とお母さんから受ける。困ったときに助けてくれたくまへ心こもったお礼をする親子は明るい生活を具体化しているように思える。

(6) くまという森の動物に対して恐れを抱くことな

く接する女の子とお母さんは、野生の動物と人間の共存を自然に受け止めている。くまも友達なさぶちゃんと同じに受け入れてしまう女の子に広い心を見ることができよう。

(7) 自然に対して構える事なくありのままを受け止める姿勢が親子に見られる。人間もくまも同次元の生き物である、つまり人間も自然の一部であることを神沢が言いたかったのである。

◎ 技術的価値
ここでも学習指導要領から技能面を伸ばす要素をこの教材の中から見つけた。

第2 各学年の目標及び内容

2 内容

B 理解

(1) エ

時間的な順序、場面の移り変わり、事柄の順序などを考えながら、内容を読み取ること。
文章の叙述に即して内容を正しく読み取るろうとすること。
人物の気持ちや場面の様子を想像しながらむこと。

オ
人物の叙述に即して内容を正しく読み取るろうとすること。

(1) エー「いちごつみ」は山の場面と女の子の家の場面に分けられる。どのような経過で場面が変わったかを読み取るのが内容把握につながる。構成は大きく分ける。この二つの場面と比べると、単純な構成のため第二学年の初期の学習としては適しているだろう。
オー女の子の言葉も物語を進行させる役割をもっている。会話の内容を的確に捉えることができれば「叙述に即して」読み取ることが容易である。第二学年の後半につなげるためには適度な叙述であろう。第二学年の後半カー地の文が少ないため人物の気持ちを想像しやすい

だろう。くまのせりふが擬音語になつていて、想像の範囲を広げている。想像する楽しさを味わうことができる。

前節の「ウーフはおしっこでできてくるか？」よりは短い簡単な読み物であるが、学習者の想像力次第では何倍にも膨れ上がり楽しくこのようにできる作品である。自由な発想を育てるため、このように想像を無限に広げることのできる教材が必要である。子ども達の発想を大切にしながらの授業展開がこの教材を生かすために求められよう。

(三) 神沢作品の教材的価値

「ウーフはおしっこでできてくるか？」「いちごつみ」この両方の作品は長年にわたって教科書に採択されている。どちらも偶然なのか「くま」が登場する。もうひとつ現在教科書に「はるのくまたち」もくまが主人公である。読み易く、子どもの興味をひく動物が登場させていることがこの三作品に共通している。また、読書経験の浅い低学年の子ども達に積極的に「読む」行為に導くための好条件がそろっているだろう。現在の小学生国語教育では「読む」ことがすべて始まりになっている傾向が強い。「読む」ことを重視するのならば、やはり読まざるおしっこでできてくるか？」は、題名を見ただけで内容は分かってきている。しかし、子どもの興味を引き付けら進んで読む第一歩を踏み出している。いちごつみ「の場合教科書の挿絵が大きな役割を担っている。昭和四十四年度版の東京書籍には題名の下に真っ赤ないちごの絵がある。これを見た子ども達は、いちごをきつかけつとして次のように上げられている。

「ウーフはおしっこでできていますか？」
物語のおもしろさを知り、図書館などで進んで物語り
を読むようにする。

「わたちちの小学国語 教師用指導書」 日本書籍
「いちごつみ」

本教材は想像することの楽しさを十分に満足させこの
期の児童に読書力をつけるものとしてふさわしい。

（「新しい国語 教師用指導書研究編」 東京書籍）

どちらもおもしろい教材をきっかけに読書への興味、
感心を養うものとして。内容のおもしろさ、文章の
読み易さが「読む」ことへの積極性を生むために適した
教材として用いられている要因であり、それが神沢作品
の教材としての最大の価値であらう。

技能的価値として両教材共に、学習指導要領

第2 各学年の目標及び内容 B 理解

（1）カ人物の気持ちや場面の様子を想像しながら
読むこと。

この項目が当てはまることは前述した。登場してくる
動物や人の気持ちを想像することは多くの文学教材で行
われている。その中でもここで取り上げている二教材は
小学二年生が本当にそれぞれの登場人物の気持ちになり
きているか？「ではウーフの考え方がポイントになり
きることの变化の過程は子ども達が自分なりにウーフに
なりきって考え、一人一人異なった考えをもつことで大
きな学習の成果を得られるだろう。神沢自身も「ウーフ
はウーフであるという結論にこだわってほしくありません」
と述べている。この自由な発想を許す教材が想像力を
を刺激する要素である。「いちごつみ」においても地の
文で「こまったような」「うれしそうに」という説明が
あるが、それを元に想像するのは一人一人の子どもの
来てもよいのである。それを認める授業展開が神沢作品
の教材を生かすためには求められる。想像力を広げる

が限りなく広いことが神沢作品の教材としての第二の価
値であらう。

「ウーフはおしっこでできていますか？」「いちごつみ」

で共通している点をもうひとつ上げると、会話文の多
さである。これは音読を楽しむために必要な条件である

物語を読み取るためや、登場人物たちの気持ちを想像する
ためにせりふを声に出すことは有効である。また、逆に

内容把握した後に、登場人物の気持ちを自分なりにイメ
ージがもてるようになる。言葉遣いも二年生が日常使用す
る言葉とはあまり相違がない。音読することで言語感覚
を磨く訓練になる。音読を楽しむ教材であることは神
沢作品の教材としての魅力をさらに大きくしている要素
であらう。

（みやかわ えり 小川村立小川中学校）